日本ギャスケル協会

第 37 回大会

2025 年 10 月 4 日（土）13 時 00 分より 於・岩手県立大学（アイーナキャンパス）
〒020-0045　岩手県盛岡市盛岡駅西通 1 丁目 7－1　いわて県民情報交流センター7F

13:00～13:05 開会の辞　　日本ギャスケル協会会長　　閑田　朋子（日本大学教授）

総合司会　矢次　綾（松山大学教授）

13:05～13:35 研究発表　　司会　木村　晶子（早稲田大学名誉教授）

「“The Grey Woman”における階級・恐怖・暴力」

大前　義幸（岩手県立大学准教授）

13:35～13:45 Break

13:45～15:25 シンポジウム

「ギャスケル作品にみるケア」

司会・パネリスト 遠藤　花子（日本赤十字看護大学准教授）
パネリスト　星　志乃　　（東京農業大学助教）
パネリスト　木村　正子　（岐阜県立看護大学准教授）

15:25～15:35 Break

15:35～16:05 総 会

16:05～17:05 講演　　司会　鈴木　美津子（東北大学名誉教授）

「女だけの世界―『クランフォード』、『妻たちと娘たち』再訪」

原　英一（東北大学名誉教授）

17：05～17:10 閉会の辞　　日本ギャスケル協会副会長　松本　三枝子（愛知県立大学名誉教授）

懇親会　17：30～19：30
於・ 駅ナカ NEO 海王(居酒屋) (https://www.hotpepper.jp/strJ004067253/)
会費 4,000 円程度

本大会に関する問い合わせ：日本ギャスケル協会事務局　E-mail:yurikohayakawa@otsuma.ac.jp

〒102-8357 東京都千代田区三番町 12 番地　大妻女子大学文学部英語英文学科 早川友里子研究室
※なお、本学術学会は岩手県立大学から全学研究支援費の助成を受けて開催するものである。

梗概

研究発表

司会　木村　晶子（早稲田大学名誉教授）

「“The Grey Woman”における階級・恐怖・暴力」

大前　義幸（岩手県立大学准教授）

エリザベス・ギャスケル（Elizabeth Gaskell, 1810-1865）の短編小説“The Grey Woman”(1861)は、ギャスケルが伝統的なゴシック・ロマンスのテーマや語りを踏襲しつつ、一家庭に潜んだおぞましい秘密や事件を暴く現代的な「恐怖」を描いたことで、その「恐怖」から親子関係や社会的階級の軋轢などの社会問題を浮き彫りにしたことが理解できる作品である。さらに本作品では、ゴシック・フェミニズムの作品構成を取ることで、19 世紀ヴィクトリア朝の社会における階級意識と家庭内暴力を鋭く描き出してもいる。本発表では、主人公アンナが上流階級出身でありながら、結婚後に暴力的な環境に置かれることでアンナに対する「階級」と暴力の対象として女性の身体が危険に晒されることで起きる「身体」への影響について、そして彼女の夫トゥレルから逃れることで起きた「階級の逆転」と「暴力からの逃避」の象徴として描かれている点に着目し、本作品における階級と暴力の関係について考察したいと思う。

シンポジウム

「ギャスケル作品にみるケア」

司会・パネリスト：遠藤　花子（日本赤十字看護大学准教授）

本シンポジウムでは、“ケア” に焦点を当てて、日常レベル的なケアから医療的行為を含む専門職によるケアに至るまで、ギャスケルがどのようにケアの概念およびその行為を見つめていたのかを紐解きたい。一般的にケアは非常に幅広い意味を含み、ペットや子供の世話から手当や介護、更には看護的あるいは医療的処置を行うことに及ぶ。ギャスケルが生きたヴィクトリア朝社会は、階級差に伴う貧富の格差が大きな状況のもと、まともに医療が受けられない人が多かった一方で、外科技術の進歩や薬品の開発、ウィルスの発見など、病気に対する概念に飛躍的な変化がもたらされた時代でもある。このような社会状況を背景として、ギャスケルが小説に描くケアから、ヴィクトリア朝の人々のケアを多角的に分析し、医療、障害者と在宅介護、セルフケアについて論じる。

「『メアリ・バートン』にみる医療的ケア」

ギャスケルの作品では、長編小説が執筆されるごとに、医者に対する見方や病気に対する戦い方に変化が見られ、同時に医療技術の進歩も垣間見られる。第一作目である『メアリ・バートン』では、身内を亡くす人が後を絶たず、医療は壊滅的な状態であるが、最後の作品である『妻たちと娘たち』で描かれている医療には、伝染病との戦いの中で新薬が開発されるなど、明るい兆しがみられる。

本発表では、過去にとらわれて進歩の見られない状況と、19 世紀末に起こる医療の革命的時代の狭間にある『メアリ・バートン』に焦点を当て、労働者階級の目線から第一作目のギャスケル作品で描かれている医療の実態を当時の医療的背景を踏まえながら考察する。悲劇的結末を迎えなければならなかった人々の叫びに対し、医者や薬剤師などの医療従事者たちがそれぞれどのようなケアを提供していたか、またその一方で、当時の人々がどのように医療を認識していたかについても論証したい。

遠藤　花子（日本赤十字看護大学准教授）

「ケアが生む連帯と変容――『ラドロー卿の奥様』におけるケアの流動性――」

『ラドロー卿の奥様』には、病者や障害者、「堕ちた女」や私生児といった、ケアを必要とする多様な社会的弱者が登場する。語り手のマーガレット・ドースンや労働者階級のハリー・グレグスン、退役軍人のキャプテン・ジェイムズらは身体に障害を抱え、ラドロー夫人や執事のホーナー氏、牧師のグレイ氏から支援を受ける。こうしたケアを契機に、階級を越えた交流が生まれ、地域社会に連帯が広がっていく過程が描かれている点が本作の特徴である。特にミス・ガリンドウは、病人や障害者、私生児を使用人として自宅に住まわせ保護している。さらに、ホーナー氏やグレイ氏もまた病を患い、他者のケアを受ける立場に移行する一方で、マーガレットら障害者たちはケアの担い手としても振る舞う一面があり、本作はケアの役割の流動性を鋭く捉えていると考えられる。本発表では、封建的な価値観を体現するラドロー夫人の領地ハンベリーが、民主的な共同体へと変容していく過程を描く『ラドロー卿の奥様』において、この社会的変容を可能にする基盤としての「ケア」に注目し、登場人物間におけるケアの実践とその相互関係を考察する。

星　志乃（東京農業大学助教）

「ギャスケル作品に見る自己の拡大の表象――自己の救済から他者の救済へ」

21 世紀の今、心理学用語でいう「自己拡張の欲求」の実現が求められ、各自がこれまで認知しなかった自己の力を認識しその発揮を目指す傾向が顕著であるが、その萌芽はすでにギャスケル作品の中に見出せる。一例として、ギャスケルのヒロインの病には身体的な病だけでなく、精神的な過重負荷が原因で日常生活に困難をきたすプロットがある。この時、ヒロインの回復に必要なケアは科学的な医療行為ではなく、他者（多くの場合母もしくはその代替となる人物）の言葉や行動であり、自己の内面に拘泥していた過去を脱出し、意識のベクトルを社会での活動へと前向き・上向きに転換することが、他者への奉仕という新しい局面に繋がる。だがそれは必ずしも自己犠牲である必要はなく、むしろ自己実現への道を開拓するものといえる。このような観点から、ギャスケルの初期作品「ペン・モーファの泉」と後期の作品『従妹フィリス』を取り上げて、ヒロインによる自己の拡大が他者救済への行動の誘因になる点を検証したい。

木村　正子（岐阜県立看護大学准教授）

講演

司会　鈴木　美津子（東北大学名誉教授）

「女だけの世界–『クランフォード』、『妻たちと娘たち』再訪」

原　英一（東北大学名誉教授）

クランフォードの「アマゾンたち」の関心事の中心は、食事やファッションなどの日常の細部にある。これらは、女の世界では、決してあなどれない重要性を持つ。たとえば、ファッションは、『妻たちと娘たち–日常の物語』のシンシアの場合のように、女の人生を左右することもあるのだから。当時の女性たち、とくに有閑女性たちの多くがたしなんでいた「針仕事」(work)もまた、ギャスケルのフィクションでは、深い象徴性を帯びている。ディケンズの『二都物語』(1859)では、断頭台の前で「編み物をする女たち」(tricoteuse)が、それまでの多くの作品で男たちの不安をかき立ててきた「がみがみ女」(termagant)の究極の姿を露わにする。一方、同じく「針仕事」にいそしむギャスケルの女たちは、過激な政治性とはおよそ無縁で、家庭性の体現者のように見える。しかし、彼女たちが編み上げていくのは、急速な産業化、鉄道網の拡大、地理学・博物学の根本的革新など、19 世紀の経済、科学、思想の巨大な変動なのである。彼女たちを 19 世紀イギリス史という奥深い迷宮の案内者、アリアドネと捉えるならば、『二都物語』のマダム・ドファルジュ等、革命の先兵としての女たちをも凌駕する深遠な意義が浮かび上がる。

アクセス

大会会場　(https://www.iwate-pu.ac.jp/access/)

岩手県立大学（アイーナキャンパス）

〒020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西通１丁目７−１　いわて県民情報交流センター７F

懇親会場

懇親会　17：30～19：30
駅ナカ NEO海王(居酒屋) (https://www.hotpepper.jp/strJ004067253/)
〒020-0034 岩手県盛岡市盛岡駅前通1-48 2F
TEL: 019-601-6880